Why not Mac?

vol.5

Macの業務アプリは必要十分か？

“基幹システムこそが
Mac導入の一番の障壁”

ビジネス環境の変化と、もはや足枷ではないアプリ数

職場でMacを使うことになった際に、最も大事なことは何か？それは、業務に使えるアプリケーションが揃っているかどうかである。小規模なチームから大企業までのあらゆる組織において、業務を進めるためには他者と連携しながら、各個人のタスクを処理する必要が発生する。

Mac向けのアプリストア「Mac App Store」を見てみると「仕事する」というカテゴリの存在を確認できる。しかし、タスク管理やアイデアやメモの記録などの業務効率化のアプリばかりが目立つ。本当にMacで業務を行うことは可能なのか？

これまで企業の中で従業員が求められてきたスキルは、特定のアプリケーションを操作することだ。Windowsであれ、macOSであれ、そのプラットフォーム上で動作するアプリケーションを使い、社内のシステムを動かし、入出力作業や成果物の制作を目的として、PCの操作スキルが要求されてきた。

しかし、現代の職場環境は変化し、他者とのコラボレーションをベースにして、いかにビジネス価値を発揮できるかが競争を勝ち抜くための重要なポイントになっている。クラウドの普及に伴い、プラットフォームを問わず使うことができる様々なSaaS(Software as a Service)が揃っている。勤怠管理や経費精算、プロジェクト管理まで、業務上のワークフローは全てWebブラウザやプラットフォーム問わずリリースされているアプリを介して行うことができるのだ。

Macの採用率の高いクリエイティブ業務の現場においても、最も使われているアプリケーションの一つであるアドビがリリースしている製品を見てみると、ビジネス現場のモバイル化の流れが起きていることがわかる。現在、アドビがリリースしているクリエイティブ向けの統合製品「Creative Cloud」アプリの数は、デスクトップアプリが25本、モバイルアプリが18本となっている。

こうした流れは、クリエイティブ環境のワークフローの変化によるものだ。社内のストレージサーバにデータを格納するのではなく、BoxやDropboxなどのクラウドストレージにアップロードし、社内外とのやり取りを行うことが当たり前になったこと、サブスクリプション化によるデバイスやOSを選ばないインストールが可能になったこと、カメラ・メッセージ・チャット等スマートフォンのビジネス活用が浸透していることが背景にある。クリエイティブ環境のモバイル移行の理由も、他のビジネス現場と同様に、業務のスピードアップを求められ、誰もがスマートフォンを持ち、モバイルワークが恒常化していること、セキュリティやデバイス管理のIT環境の充実、クラウドによりデータ保存場所からの解放されたことが、アドビのリリースしている製品の変化の要因でもある。

Appleのビジネス向けのWebサイト「Apple at Work」では、他のどのモバイルプラットフォームよりも多い、23万5千を超えるビジネスアプリケーションが揃っている、と紹介されている。ただ、その中で紹介されているアプリケーションはMicrosoft OfficeやG Suiteなど、iOSとの連携機能などを含めて、macOSとの親和性が高いものが多い。また、コラボレーションのためのアプリケーションとして、SlackやCisco Webex、チャットやテレビ会議など、チームや社外のメンバーと綿密にコミュニケーションを取りながら、業務を進めるためのアプリケーションも多く紹介されている。ここで紹介されているアプリケーションのほとんどが、グローバルでビジネス展開されているものが多く、日本企業でも採用され始めているものが多い。

一方で、その企業独自のビジネスプロセスを動かすための基幹システムは、まだまだオンプレミスなシステムが中心に残っている。ほとんどの企業では、販売管理や顧客管理、受発注など、その企業独自の業務プロセスが存在し、専用のシステムを構築し、運用していることがほとんどだ。

こうした業務上必須なアプリケーションの利用には、Windows PCの利用を前提に、Internet Explorer(IE)を使ったWebベースで開発されたシステムが多い。レガシーな業務システムが、仕事を進める上での必須アプリケーションとなっており、現場のモバイル化が加速する中で、ビジネスを推進する足枷になっているのだ。

構築された業務システムの対応OSや推奨環境がInternet Explorer(IE)のみといった状況から、Google ChromeやSafariなど複数のWebブラウザへの対応や、デバイスの変化に伴う複数のOSプラットフォームに対応していくことが、今の企業の情報システム部門の大きな課題の一つになっている。

ビジネスの現場で求められていることは生産性を高めること。どれだけ創造的に仕事ができる環境を創り出すことができるか？そこには、自社のために作られた業務システムが存在しているのではなく、これまでのやり方を「ガラッと変える」ことで、自分たちのワークフローやビジネスプロセスを見直すきっかけになり、新たなビジネス価値を発見することにつながるはずだ。